

II 市町村ワークショップと地域再生フォーラム

糸長浩司¹⁾・橋本忠義²⁾・奥村 玄³⁾

Workshop and Forum on Local Revitalizing

Koji Itonaga, Tadayoshi Hashimoto & Gen Okumura

要 約

丹沢大山地域の8市町村に本地域再生調査への協力依頼と併せて、各市町村での地域再生に関する施策状況を把握した。更に、環境、農林、観光、教育系の職員の参加による、環境、農林業、観光に関して、現状、魅力発見、課題、地域の再生ビジョンについてのワークショップを3回開催した。第1回は、魅力、人材、悩み、なりわい面影、暮らしの知恵などについてマップ化し、魅力は山の方に多く里山につながっていないこと、山を生かした新しいなりわいの知恵と技術を作っていく必要性、新たな人材を掘り出し、人材をつなげていく大切さが指摘された。第2回は、3テーマの論点をもとに課題を整理し、各自治体での関連事業リストを参考としながら、地域再生の施策の提案を協議した。登山のオーバーユース対策と観光振興策、環境教育学習の市町村連携方策、里山エリアでの森林管理と再生のあり方と市町村の役割、郷土食おこし、鳥獣被害対策、山の風景・町並みづくりなどが討議された。第3回は、再生政策のシナリオ案を調査チームより事前に提示し、それを題材に、地域再生の政策シナリオの修正・具現化に向けた課題を討論した。

地域再生フォーラムでは、地域住民、観光業、林業、建設業、ボランティア団体等の代表者に2回集まってもらい、3テーマ別での課題、再生のビジョンについてワークショップを開催した。2回の地域再生フォーラムでの結論は明確には出ていないが、フォーラムを開催することにより、地域再生調査での課題、再生のための政策の課題等、各調査グループでの調査項目、調査内容の充実化及び政策提案の充実化につながっていった。

1. 市町村での地域再生の取り組みと課題

(1) 8市町村での地域再生に関する特徴ある事業

各市町村8市町村(秦野市、厚木市、伊勢原市、松田町、山北町、愛川町、清川村、津久井町)で、各市町村での独自性ある地域再生の試みがされている。麓集落での里山再生、里山づくり、農業体験、自然体験等で

市農村交流活動に関する事業、里山を含む地域全域での保全と活性化に関する総合的なビジョンづくり事業や地域別での土地利用計画事業、及び鳥獣被害対策等が事業として取り組まれてきている。これら各市町村での独自の取り組みの広域的普及や連携が今後も求められる。

表 1. 各市町村別での地域再生に関する特色ある事業リスト (聞き取り調査より)

市町村名	地域再生に関する特色ある事業 (住民活動も含む)
秦野市	「秋の神奈川再発見キャンペーン」協賛事業 (丹沢山麓「そば打ち体験と温泉満喫ツアー」)、ネイチャー発見隊、生き物の里、里地里山保全再生モデル地域事業 (環境省自然環境局)、里山づくり推進事業 (神奈川県)、照葉樹の森づくり事業、地下水汚染対策、荒廃・遊休農地解消対策事業、アグリサポート (援農制度) 事業
厚木市	自然学習拠点整備による再生計画 (七沢地区のロープウェー計画)、仮称七沢ふるさと食文化村構想基本計画、七沢自然教室、厚木市エコ・レクの里構想 (飯山・東丹沢温泉郷および飯山、七沢地区とその周辺)、里山マルチライブラリー事業、里山保全推進事業 (七沢)
伊勢原市	「ワークショップ形式による公園の計画づくり」(主体は神奈川県)、そばづくり農業体験事業、市民活動林整備事業 (高森)、谷戸田保全整備事業/谷戸田オーナー制度 (日向・小易)、みかんの木オーナー制度 (比々多地区)、地場産野菜料理コンテスト、歴史解説アドバイザー養成事業、歴史文化財散策コースの整備
松田町	自然館事業 (西平畑公園)、花木植栽事業 (寄地区)、寄自然休養村「ホテルを育てる会」、みかんの木オーナー制度、寄自然休養村養魚組合
山北町	中山間整備事業による里山づくり、県産木造公共施設の整備、山北町土地利用に関する基本条例、7地区別での地域住民による地域づくり
愛川町	水源地域交流の里づくり (神奈川県)、里山保全推進事業 (神奈川県、八菅山地区)、愛川町自治基本条例、有害鳥獣対策用備品購入費補助金
清川村	水源地域交流の里づくり (神奈川県、宮ヶ瀬)
津久井町	サイクリングツアー (津久井ー横浜間水道みち)、水源地域交流の里づくり (神奈川県、青根)、中道志川トラスト運動 (中道志川トラスト協会、道志川 (拠点: 道志川の家))、「遥かな友に」道志川合唱祭 (青根の自然休養村)、東海・首都圏自然歩道管理委託事業、グリーンカレッジつくい、道志川とまり隊、わくわく冒険隊 (中野)、有害鳥獣対策

1) 日本大学生物資源科学部 2) 農村都市計画研究所 3) GEN プランニング

表 2. 市町村別での聞き取りによる地域再生の課題

市町村	参加者	現状と課題のコメント
秦野市	企画課 農産課 観光課 森林づくり課	<ul style="list-style-type: none"> ・里地里山の再生にNP0, 市民の参加によって本格的に取り組み始めているが、今後同様の事業を様々な主体がやりはじめると複雑になる。里山で事業を企画している主体間で調整が必要となる。 ・他の市町村と連絡をとれていないことから、市独自でやることで効果をあげていない課題もある。 ・オーバーユース問題について、適正利用規模の設定は可能か。丹沢は本市にとって貴重な観光資源である。 ・ヤマビルが拡がり5月下旬から9月頃まで山にはいれない。ヒルの被害の対策を研究する上で、里地里山保全再生モデル事業地で4種類の環境条件のちがうパターンを試験地を設け様子をみている。
厚木市	企画政策課 農業政策課 地域再生課 環境総務課 観光政策課	<ul style="list-style-type: none"> ・観光客の入込み実数が58万から32万に減少している。本市では、本格的な取組みに着手している。七沢地区で地域再生委員会が組織され毎月会合がもたれている。 ・総合調査では、大山がないがしろにされているように感じる。 ・大山を中心として水源の役割を果たしていると考えている。 ・サル被害に対して追払いを実施しているが、森を復元し以前の状況に戻さなければならないと考えている。 ・ヤマビルも4月～10月に出ている。 ・鳥獣被害については、広域的な管理計画が必要。 ・鹿の頭数は、現実と数値の間に偏りがあるのでは。
伊勢原市	企画調整課 農政課 農林整備課 環境保全課 教育委員会 企画調整課	<ul style="list-style-type: none"> ・森林の管理は市町村では難しい。農地と比較してお金を生まない状況に今はある。お金を使つての森林管理をどう考えていくべきか。 ・山林所有者の意識に日本人独自の土地観があり、山の管理をボランティアに任すことはどうか。活動の土地が手に入らない。問題はそこにあるのではないだろうか。 ・環境保全活動を見ると、市外の人の参加が成功例となっている。人材はいるが連携されていないようだ。 ・鳥獣被害を避ける防護柵は、パッチワーク的に設置されている。台風による損傷もあり、持続性に問題がある。耐用年数は3～4年の場合もあり、4年目以降の維持管理の仕方に課題がある。
松田町	企画財政課 産業観光課	<ul style="list-style-type: none"> ・有害鳥獣対策の防護柵は、今年度より町が中心に行っている。柵のたて方は、県のやり方を基本に地元意向によっている。現在は、柵以外の方策は狩猟しかない。 ・鳥獣被害に対して、1市5町が参加する協議会がある。イノシシを駆除するための協議会で、新しい方策を考えようとする所ではない。 ・連携のためには、基礎的なデータが共有される必要がある。シカの場合、移動経路より実態として実数をつかまないと対策がみえない。 ・食を生かした活動は以前からあるが、今は順番が逆で、食材をつくれる環境をつくらなければいけない。 ・町内には、柵付きの休耕地があるから、各自治会で「みろくじ農業学校」のように定年後の人を受け入れる市民農園があってもよいのでは。
山北町	企画課 産業観光課	<ul style="list-style-type: none"> ・本町では、土地利用計画を担保する必要から、土地利用に関する基本条例をつくっている。 ・「人と自然が共に生きるまちづくり」のコンセプトを踏まえ、具体的な施策を展開している。丹沢大山再生の施策の参考になるのでは。 ・自然再生に偏らない地域再生が大切だと考えている。 ・平成16年2月より町内を7つの地区に分け、地域が自主的に自立できるよう地域づくりを進めている。開発でない地域活性化を目指し、住民組織をつくり話し合いがもたれている。行政への提案、地区でできること、地区外と協力によることなど様々な提案が議論されている。 ・ヤマビルの被害はない。それ以外の有害獣は柵による対策に限られている。
愛川町	企画政策課 農政課	<ul style="list-style-type: none"> ・サルに電波発信機をつけて追跡し、サル追払い用のエアガン、花火を補助している。 ・シカが持ち込むヤマビルについては、駆除方法について研究要望をだしている。 ・シカなどの広域防護柵、個別の囲い込み作で対応しているが、ヤマビルのために山仕事ができない状態にある。 ・町内のハイキングコースとシカの移動ルートが重なることにより、ヤマビルの被害が出ている。仙果山コースは、ヒルコースとなっている。 ・農政サイドの政策課題は、一番に鳥獣対策につきる。 ・テーマは広いが、自然再生と地域再生をあわせた予算処置ができないか。
清川村	政策推進課	<ul style="list-style-type: none"> ・ヤマビルによって畑離れが起こり、遊休地化し、荒廃地が増えている。村としては、ヤマビルが一番大きな問題となっている。この問題をクリアしなければ、何もできない。 ・ヤマビルの生息域がどんどん拡大しているため、村では、殺ヒル薬剤の散布、スプレー式殺ヒル剤の補助を行っている。 ・生息状況を調査し、マップ化している。ヤマビルは、宮ヶ瀬の西側の一部の地域に限っていたが、現在は役場近くでも見られる。 ・鳥獣被害が解決されないと、人を呼べない、住んでもらうことも出来ない。 ・時間は、かかるが森林再生が根本解決になる。シカが本来あるべき所において、ある程度人間の暮す場所と離れていること。シカが山に戻れば、ヒルも絶滅するのでは。
津久井町	企画政策室 産業経済課 環境課	<ul style="list-style-type: none"> ・鳥獣被害の程度は、市町村の差があり、町内でも差が見られ、関心の違いによって表れかたに差異がある。 ・サルは、捕獲できないので、追払いを委託している。サルに発信機をつけ、町のHPでサルの情報を公開し、被害の軽減を図っている。毎回夕方、翌日の移動行動を予想し、注意を喚起している。 ・猟区の設定やガイド猟師の高齢化が問題となっている。 ・町内に多くある財産区の森林の課題もある。 ・町として山林をどうしていくか、近く市町村合併もあり山林については政策的に手がつけられない状態にある。

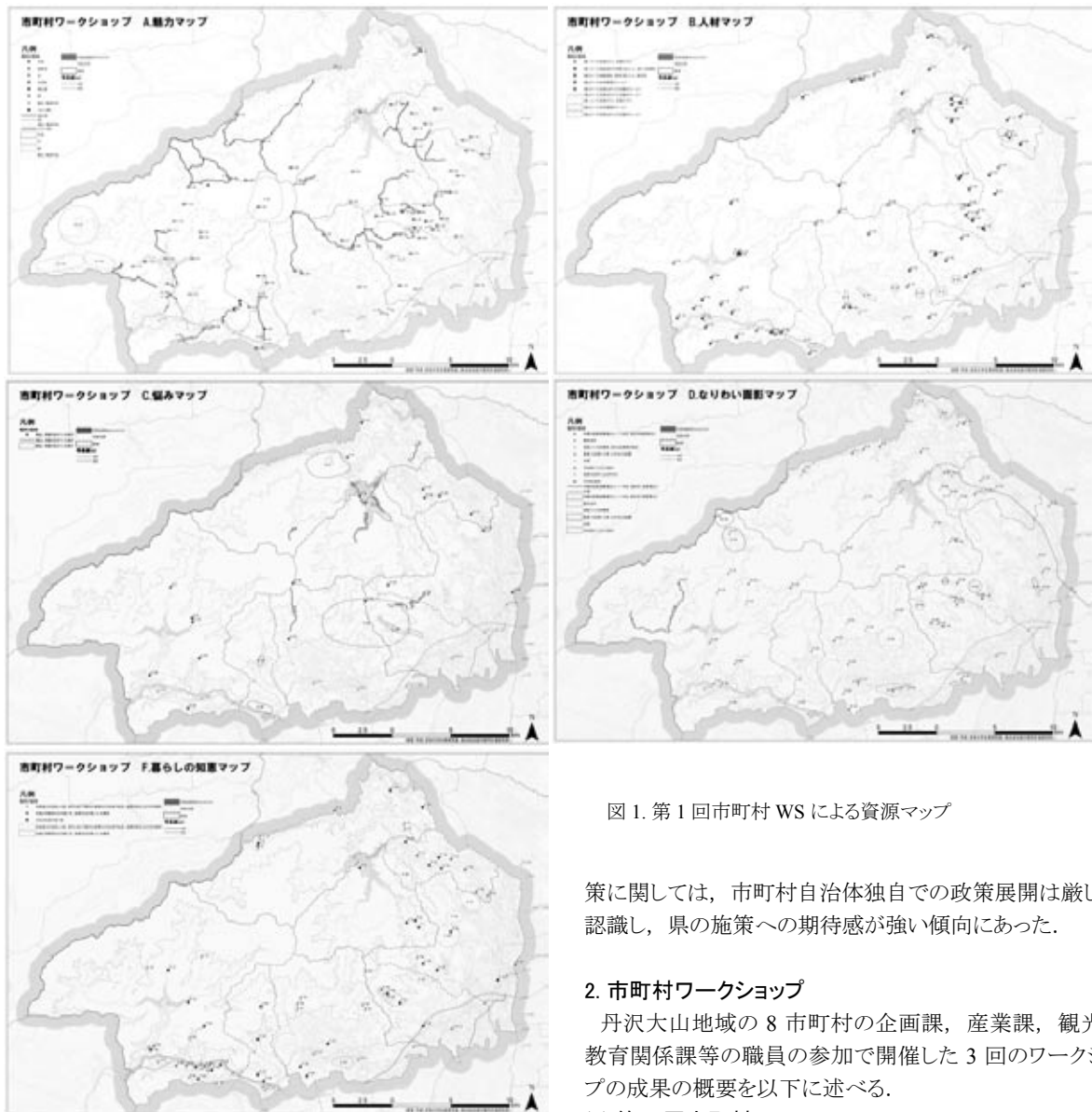


図1. 第1回市町村 WS による資源マップ

策に関しては、市町村自治体独自の政策展開は厳しいと認識し、県の施策への期待感が強い傾向にあった。

2. 市町村ワークショップ

丹沢大山地域の8市町村の企画課、産業課、観光課、教育関係課等の職員の参加で開催した3回のワークショップの成果の概要を以下に述べる。

(1) 第1回市町村 WS

A. 魅力マップづくり

①現状：愛川・厚木では、七沢温泉、自然教室などをはじめ施設が多数ある。伊勢原・秦野では、名水スポットや眺望の良い場所があり、ウォークラリーもある。松田・山北では、古いものでは「やぶさめ」等の山のハイキングコースや水、新しいものでは丹沢湖のイベントがある。津久井・清川では、東海自然道など、丹沢山ルートに人気がある。環境学習などの拠点には1年中人が訪れてくる。

②総括：山の方に魅力が集中するが、里山の方につながっていない。点だけではなく面として広がりも欲しい。山岳も重要であるが、麓と山岳をつなぐことが今後のテーマとなる。

B. なりわい面影マップづくり

①現状：愛川・厚木には古い石切場があるが、石切、石材等の産業遺構の他はあまりない。伊勢原・秦野では、たばこ乾燥室、炭焼き小屋などがある。山北はかつて林業鉄道、江戸後期の用水の遺構があった。棚田が減った。製材所は津久井に4箇所、清川に1箇所、清川では地産地消が行われている。

②総括：この地域は歴史的に林業が成立していたのかどうか。山の材を使う技術があったはずだし、丹沢大山の人

(2) 市町村行政での地域再生の課題

丹沢大山地域での8市町村の行政担当者への聞き取り調査より、地域再生に関する個別課題や再生のための政策提案について調査した。今回の丹沢大山総合調査の意義と目的に関する理解が各市町村とも不十分であり、県の調査との認識が強く、市町村との協働的な調査としての意識は希薄な状況であった。また、ブナ枯れ等の生物危機や公園のオーバーユース問題、麓の鳥獣被害問題、森林や里山の荒廃化という自然環境の問題と地域の社会経済の問題を同時に調査し、その再生を検討するという調査の趣旨の理解を得ることに苦労した。丹沢大山総合調査の当初のイメージとして自然再生が主であるとの認識が強く、地域再生という地域の社会経済面での再生も含まれることや、地域主体、市町村間での連携、市町村と県の連携で実行していくことの重要性を理解してもらうことにつとめた。

市町村で抱えている一番の課題は、ヤマビル、鹿、イノシシ等の鳥獣被害問題であり、山麓に近い町村と都市化、市街地化の市町とでは、地域再生に関する意識の差がある。しかし、概ね、森林での林業、経済行為に関しては共通して厳しい状況認識となっており、この課題の解決のための方

達はなりわいを3つ～4つぐらい持っていたのではないかと、ダムで消えたものもあろう。山を生かした新しいなりわいの知恵と技術を作っていく必要がある。

C. 人材マップづくり

①現状：愛川・厚木では、酒造産業、温泉のおかみさん、産業フロンティアなどの人材を集めるとよい。伊勢原・秦野では、山小屋のオヤジさん。ふるさと公園ソバ職人。森林組合。伝統工芸の凧、コマなど。四十八瀬川自然村の共同管理や、自治会で植樹、伊勢原の集落単位の活動も見られる。松田・山北では、ヤマメの養殖などがある。お茶(足柄茶)が多い。津久井・清川では、鳥獣保護を猟友会が担っている。伝統芸能が残っている場所がある。

②総括：誰がどんな役割を担っていきけるのかを明らかにし、新たな人材とそれらの人材をつなげる。

(2) 第2回市町村 WS

課題とその解決の政策提案につながるものを抽出した。

A. 観光（ツーリズム）・環境教育学習

山岳のツーリズム振興と山麓部での観光振興との連動が弱く、地元経済振興につながらない状況をどう打破していくのかの課題が明確となり、登山との関係した観光振興策の検討が必要となっている。山岳のオーバーユース対策に対して、市町村にはその直接の担当者が存在せず、今後は自然環境保全センターとの連携を密にした活動の必要性や既存の登山道巡視員制度の充実化が必要となっている。

地元の観光振興での人材づくりとして、観光ガイド育成が重要であり、また、8市町村の連携した組織活動の充実化が必要となっている。山のツーリズムと麓のツーリズムの特徴を活かし、かつそれらの連携を図る総合的なツーリズム施策が必要となっている。

B. なりわい再生（循環型森林資源活用）

拡大造林後の森林管理が進まない状況であり、経済的な採算があわない状況をどう打破していくべきかが大きな課題であり、県産材の普及のための施策展開、林業の集約化が期待されている。また、不在地主問題に対して、市町村、森林組合の役割の重要性も指摘された。一部、山麓での里山再生活動が都市の市民ベースで展開してきており、今後は、都市住民を巻き込んだ里山文化の復活のための施策の展開が必要となっている。

C. 暮らし再生（歴史・生活・文化）

麓での鳥獣被害問題とその対策方法に話題が集中した。現況の保護対策の施策の見直しの必要性が指摘された。また、現在の防護柵の機能の限界も指摘され、抜本的で総合的で、地域的な対策の必要性が指摘された。また、鳥獣被害のための営農意欲の減退、防護柵の景観破壊等の課題が出され、山際集落の環境管理、景観形成の積極的な施策の展開が提案された。更に、農業振興策としての食育施策も提案された。

表3. 登山ツーリズムについての課題と施策提案結果（第2回市町村 WS）

課 題	提 案
観光振興と山のツーリズム政策が一致していない。 登山等の山のツーリズムと麓の観光との分離と連携をどう図るか 各市町村に観光担当者はいるが、登山対策・オーバーユース対策等の担当者はいない	
（登山オーバーユース） 登山方法とルートの整理 登山者用トイレの整備と管理の方法	・登山道巡視員派遣制度の継続等でオーバーユース対策手法として活用、人材育成等 ・今年度から始めた自然環境保護センターと地元市町村行政担当者との話し合いの場の拡充
（観光振興） 登山客は麓の観光客とは別であり、ほとんどお金を地元におとさない。 登山振興策と地元の観光振興を分離して考えるか。新たな登山関連、山関連の地元経済振興につながる観光客を掘り起こすか。	・丹沢大山地域での8市町村間の情報ネットワーク、マーケティングなどの連携の育成。 ex. るぶの活用 ・各橋町村が独自に取り組んでいる、麓での観光ボランティアガイド育成の共通・連携化

表4. なりわい里山の課題と施策提案結果（第2回市町村 WS）

課 題	提 案
拡大造林したが、山の関わりが減少したこと	・山への係わり復活、林産物の再生産
不在地主所有者、持ち主が複雑になりすぎている	・市町村・森林組合での洗い出し
丹沢南麓では市民活動の場としての里山づくり	・里山山村の復活、都市民との連携
津久井・山北には林業残りが小規模	・山への係わり復活、林産物の再生産
県産材のコスト高	・林業の集約化、流通ルートの簡素化
県産材の普及PR不足	・町内材活用
	・安定供給をするために供給体制を整える
	・使える林道を復活する
	・林業を林道に集約させれば使えるのでは…

表 5. 暮らし再生の課題と施策提案結果（第 2 回市町村 WS）

課 題	提 案
(鳥獣被害について) ・サル、シカ、イノシシの保護優先策と種の保存基準 ・山ビル被害が同時に拡大している（野焼きができない） ・柵である程度防げるが河川や幹線道路では難しい	この項目が最も深刻でWSの時間の9割をついやした。 ・暮らしの面からの基準づくりによる法制度の改正 ・広域的な対策、説明（教育）、山の利用法を考える
(集落の風景・街並みづくり) ・鳥獣対策の柵が景観を壊している ・田畑荒れ風景よくない ・かつてあった各集落の特色がなくなる	・荒廃農地の再生
(農業振興) 鳥獣被害との結びつき ・受皿の必要性、担い手の形成 ・農業を簡単にとらえている人多い	・現組織、制度の見直し、情報機関を広域で作る必要あり ・食育事業を地域で進める



図 2. 第 1 回市町村 WS



図 3. 第 2 回市町村 WS



図 4. 地域再生フォーラム

(3) 第 3 回市町村 WS

A. 目的と方法

具体的な政策提案を絞り込むワークショップとした。「8 市町村での、丹沢大山地域（特に山麓地域）での地域再生に関する政策的ニーズを明らかにし、地域住民、地権者、都市住民、ボランティア、各種団体、行政が多様な課題に対して柔軟に関わりを持ちながら、丹沢大山地域での環境（自然・文化社会環境）を維持、発展させていくことが重要であり、行政区画や主体の別にこだわらない新たな協力連携のしくみが必要である。」との趣旨で実施した。丹沢大山の 8 市町村職員（企画、観光、農林業、建設、教育、生涯学習の行政担当者）計 19 名の参加で実施し、①政策ニーズづくりに向けた論点の共有（シナリオの提示）と

② WS の成果としてフロー図を作成して検討した。

3 グループでの討議を実施した。第 2 回までの WS の成果や調査結果を元に、議論の手がかりとなる「シナリオ」を調査チームがあらかじめ用意し、具体的な論点を共有した。以下の点を留意点とした。「これまでの行政の施策では打破できなかったことに対し新たな施策を提案する（例えば、サルは捕獲してはいけないなどの制約や、これまでの常識を取り払う）。「過疎を逆手にとる」に習い、『これ、環境学習に使えるんじゃない！』というようなジャンルを超えた発想もフロー図に書き込む（例えば、サルの追い払いを体験学習にできないか）形式でのワークショップとして進めた。

以下があらかじめ提示したシナリオである。

表 6. [観光（ツーリズム）・環境教育学習グループ] に提示したシナリオ（第 3 回市町村 WS）

<p>○ 議論のきっかけとするシナリオ</p> <p>・エコツーリズムは、来訪者に対しては地域独自の多様な資源を学ぶ機会を提供してくれる。しかし、丹沢に住む人たちははたして、自分達の住む地域の素晴らしさを十分に理解してるのだろうか。自ら足元の資源に学ぶ、それが地域の暮らしを豊かにしていく。</p> <p>⇒ 丹沢に住む人たちが、暮らしやなりわいの中に丹沢の豊かな恵みを存分に生かしていくことが、外部の人たちにとって魅力的な観光の資源となるとともに、定住を促す原動力になる。</p> <p>～その他の視点～</p> <p>・北山町「人と自然が共に生きるまちづくり」において地域で自立することがテーマとなっている。施策は参考になるのでは…</p> <p>・秦野市「里地里山の再生」に市民参加で取り組みが始まっている。種々の事業が複雑にならないような工夫は？</p> <p>・来訪者を単なるお客にしない。⇒ 丹沢に役に立つ人になってもらうには？</p>
--

表 7. [なりわい再生（循環型森林資源活用）グループ] に提示したシナリオ（第 3 回市町村 WS）

<p>○ 議論のきっかけとするシナリオ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・そもそも、丹沢の林業は素材生産で成り立っていたのではなく、戦前は珍しい大径木を注文に応じて販売していたのではないか。現在、仮に安定して出荷するとしても大量ではない。つまり、地元で供給することで丁度よい、という考え方はどうだろうか。外部に販売するよりも、まず地元で消費できないだろうか。HOPE計画にも通じる特色づくりにならないか。 ・「里山・麓部で問題になっている人工林の荒廃」や「里山の広葉樹二次林の過熟問題」、「竹林の繁茂侵略問題」に対して各自自治体独自で取り組んでいることを丹沢全体に広げることができないだろうか。特に、森林組合等と協働して森林所有者へどのようにはたらきかけることが効果的なのか。実践例の情報交換が期待される。 <p>～その他のきっかけとなる視点～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山にシカのエサが豊富にあれば、里にはおりてこない？ ・森の復元は、どの方向で進めるのか？ ・地権者が膨大な数になりつつあるというが、一体、どの程度なのか？
--

表 8. [暮らし再生（歴史・生活・文化）グループ] に提示したシナリオ（第 3 回市町村 WS）

<p>○ 議論のきっかけとするシナリオ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ粉食文化、カラムシ織、かつての丹沢の衣食の文化として着目している。丹沢全体を眺めると、多様な食物が発見できそうである。水も美味しいとされている。これは、丹沢の地域にふさわしい地産地消を考えることになるのではないか。 ・シカが麓に下りてくることでヤマビルの範囲が広がっている。サル行動予測をして追い払いをしている。狩猟者を増やすことでシカを減らしたり、現地で解体埋設するだけでなく、生態系の研究者が同行するような一石二鳥のアイデアはないだろうか。 <p>～その他のきっかけとなる視点～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・北山町では、ヤマビルの被害がない。なぜか。 ・愛川町では、サルに発信機をつけている。津久井町でも発信機をつけて予測しながら追い払いをしている。 ・ヤマビルを運んでくるシカを山に返すには…。

B. ワークショップの成果

時間的制約もあり、全ての課題の解決のための施策提案が抽出できなかったが、各グループ別での施策提案について述べる。

a. ツーリズム・環境教育学習グループ

エコ登山、エコツーリズムの推進であり、そのためには「丹沢大山エコツーリズム協議会」のような協働組織の設置が必要である。一部の登山道でのオーバーユース対策としての登山規制の検討、丹沢と大山での観光・ツーリズム的な機能の分担を明確にし、地域的特性を活かした丹沢大山地域での総合的な観光施策の展開の必要性が指摘された。また、観光の広域化、共同化の促進が必要であり、8市町村での観光に関する温度差（南北での観光客の入り込みの相違等）をなくすこと、観光資源の見直しと発掘の必要性、健康づくり等の新たな観光のテーマの構築が重要となっている。丹沢大山の広報手段としての統一したガイド育成、マーケティングの統一化施策が必要となっている。環境教育を含めた丹沢の自然・文化情報を観光的な活用の視点からみること、環境教育学習での市町村の分担と連携が必要となっていると指摘された。

b. なりわい再生グループ

素材生産だけでは丹沢大山の林業は厳しいという歴史的な状況の認識が強調された。丹沢大山地域での林業は歴史的に設立していたのかという疑問も提示された。その状況の中で、森林環境、水源環境としての公的な資金投入

での管理施策の継続の必要性が指摘された。一方で、消費地に近い地の利を活かした県産材活用の住宅建設の普及施策の必要性が指摘されたが、その反面のその可能性に対する疑問も提示され、また、十分な川上と川下の連携イメージの共有化が現在図られていない。森林環境の荒廃化、人工林化のために鳥獣被害が山麓で発生しており、野生動物の管理と食材利用施策も必要性も指摘された。都市住民参加型の里山管理や環境教育的な活動促進の施策の展開の必要性も指摘された。

c. 暮らし再生グループ

ヤマビル、イノシシ、サル、シカによる鳥獣被害に対する対策の必要性が緊急的な課題として提示された。柵設置施策での一定の効果があることも指摘される一方で、柵の効果がない状況も指摘された。柵だけでなく罠設置、猟友会活動の活性化策の必要性が指摘された。全体的には、現況の広域的な柵の維持と拡大施策、野生動物の移動を考慮した広域的な対策、生態系の状況を認識した上での総合的対策、地元住民と連携した地域的は総合対策の必要性とその行政的支援が必要との認識で一致した。鳥獣被害対策の施策展開以外では、昔の里山での暮らしの再生として、伝統文化を活用したツーリズム振興、大山の縄文遺跡文化の活用等が指摘された。国道沿いの集落に比較して、山麓部の集落に多様な課題があり、この地域での暮らしの再生に関しての施策展開の必要性も指摘された。

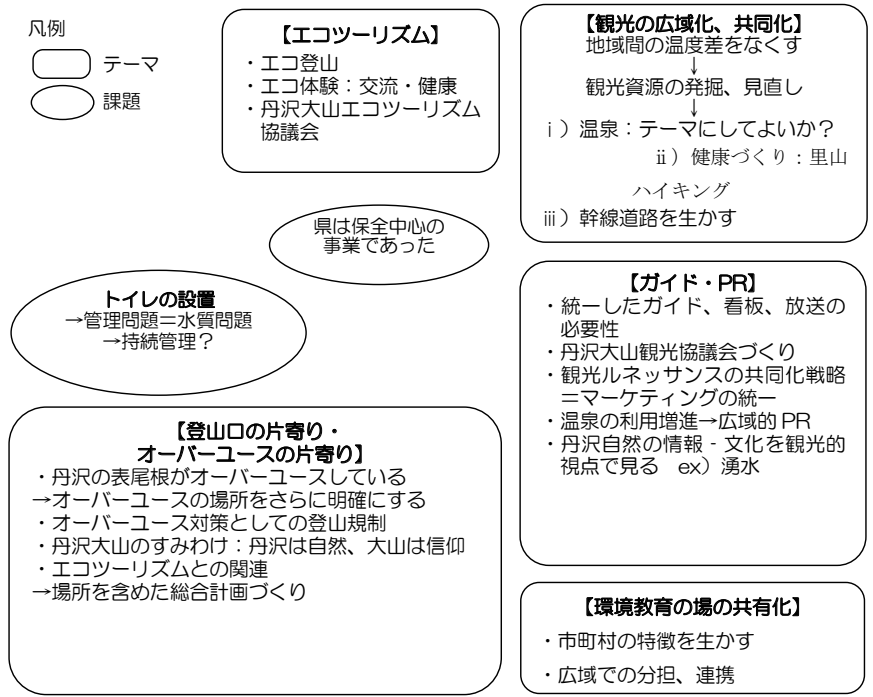


図 5. 観光（ツーリズム）・環境教育学習グループの成果（第 3 回市町村 WS）



図 6. なりわい再生（循環型森林資源活用）グループの成果（第 3 回市町村 WS）

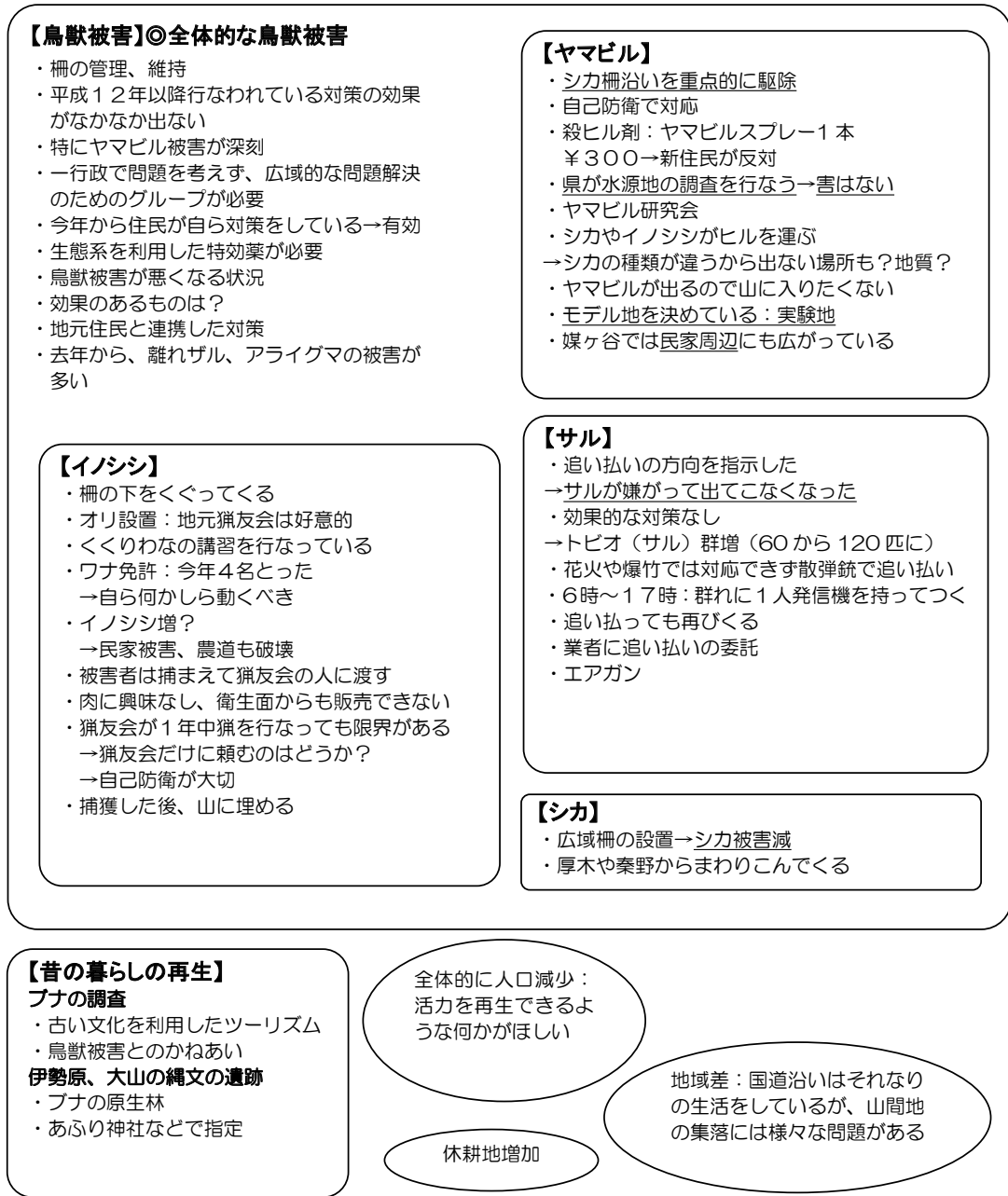


図7. 暮らし再生（歴史・生活・文化）グループの成果（第3回市町村WS）

C. まとめ

a. 観光ツーリズム・環境教育での地域再生の市町村の問題意識

丹沢大山の自然資源、地域資源を活用した観光振興に対する問題意識は参加市町村の担当者は持っている。また、個別対応ではなく、丹沢大山地域全体での総合的なツーリズム戦略、観光戦略の必要性も感じている。そして、自然環境、エコツーリズムの必要性と可能性も認識している。また、市町村によっては、個別に観光ガイド育成を試みている。

ただ、今回の丹沢大山総合調査が十分に浸透しておらず、今回の調査を活かした、丹沢大山地域としてのツーリズム戦略を主体的に考える状況には残念ながらない。県の自然保全、登山実態に関する調査という意識が強いのか、本調査での地域的な観光、ツーリズム振興に

う繋がるかの認識は薄い状況にある。

丹沢大山でのエコツーリズム振興の必要性は認識されているが、一方で、登山等での山岳部での観光より、麓の観光振興の必要性が指摘されている。特に、登山客が麓、地元経済振興に直接つながらないことや、観光客の減少傾向に対する心配があげられている。

また、丹沢大山を一元的にとらえず、信仰の山としての大山と、自然保全、自然体験の山としての丹沢とを区分して、その保全と再生、利用の方法について検討すべきとの意見があった。東西南北での丹沢大山国定公園地域を取り巻く社会、歴史、経済環境が異なる中で、その地域特性を活かし、尊重した、ツーリズム・環境教育戦略を検討することの必要性が指摘された。

b. なりわい再生での市町村の問題意識

神奈川県、丹沢大山地域での経済的な林業振興の難し

さが多く指摘されてきている。この傾向は、毎回のWSにおいても同様であった。県の水源環境地域としての森林の保全的管理の重要性が多く指摘され、一種の公共支援型森林管理業としてなりわいを位置づける傾向にある。個人林、共有林の維持管理に対する困難さが指摘され、その解決策としては、補助金行政での管理的なりわいとして位置づけることが指摘された。

一方で、森林生態系のゆがみ、人工林の広葉樹林への転換の必要性、鳥獣被害対策の必要性も指摘され、特に、近年のヤマビル被害に対する対策の緊急的必要性が指摘された。

県民に広く、丹沢大山の森林資源、木材資源の現状理解を促し、また、県産材の住宅普及等も話題として出るが、その実行性、効果に対しての疑問の提示もある。県有林での管理林業、個人有林、共有林での水源対策的保全施策が進められてきているが、当該市町村での森林施策、林業施策が手薄であり、行政職員の森林管理、林業振興に関しての施策展開を十分にイメージできない状況にあり、県及び市町村での森林管理、利用に対する総合的双方的なシステムの確立が望まれる。

c. 暮らし再生での市町村の問題意識

丹沢大山地域での独自の暮らしの再生、蘇生、そして、それらを活かした、新たな定住、交流環境づくりを想定してワークショップを進めたが、結果的には、当面の緊急的課題である、鳥獣被害問題、対策方法についての論議が中心となった。特に、イノシシ、ヤマビル、サル被害に対する話題に集中した。広域シカ柵の効果が出てきていることを指摘する人もいるが、一方で対策の効果を疑う意見もある。

シカ、サルの限定された保護鳥獣に対する保護、駆除だけでなく、野生動物に対する地域を挙げての総合的な野生動物対策が求められていることは確かであり、山麓部での農村集落の土地利用の荒廃化、荒地の増大等対策も合わせて取り組むことの必要性は認識されてきている。今回の生きもの再生、保護対策と合わせて、人間、特に、山麓集落での生活、暮らしの再生を、鳥獣被害対策を含めた、総合的な視点からの施策の必要性が指摘され、それに対する地域住民、地域行政との連携が必要であり、その必要性を十分に認識してきているといえる。

3. 地域再生フォーラム

市町村の職員による地域再生のワークショップだけでなく、丹沢大山地域の住民、観光業者、林業家、建設業者、里山再生や登山環境整備のボランティア団体等の多様な関係者が集まる地域再生フォーラムを2回開催し、地域再生の課題及び施策展開の方向性についての意見交換の場とした。地域再生調査チームの調査結果を随時報告し、今回の総合調査の中での地域再生調査の意義と今後の展開に関する理解を得、また、地域再生調査のより具体的な対象者の選定や調査内容を検討する上でも非常に寄与するフォーラムとなった。

(1) 第1回地域再生フォーラムの成果

参加者に、まずは今回の丹沢大山総合調査の趣旨、地域再生チームの調査内容を説明し、調査に関する理解を得てもらい、その後、市町村ワークショップと同様の3グループに分かれて、自由な意見交換のワークショップを実施した。

A. ツーリズム・環境教育

登山道、水環境、山と里、管理、観光と里山景観、キャンプ場、子どもの環境教育等が話題となり、以下の意見が出た。

- ・オーバーユースの問題に対し、分散的な登山計画が必要。
- ・丹沢の乾燥化について、データをとる必要がある。
- ・「山の神」の分布を調べて、里山、暮らしにとつての丹沢大山地域での全体像が描けるのではないかな。
- ・どこを守り、どこを使い、どこを再生すればいいか、丹沢大山地域での新しいゾーニングが必要。
- ・里山の言葉は安易に使わないほうがよい。里山は人がだまって入ることはいけないとされている。
- ・いい景観を残して、休み、交流し、体験できる環境、観光を考えたい。量より質の問題だ。
- ・キャンプ場のマナーの問題は、利用客と経営者の双方の問題だ。
- ・いろいろ体験できる小屋が丹沢大山地域に分散的にほしい。「33ヶ所巡り」の感じで使えるとよい。
- ・子どもが自然とふれあうことで感性をよみがえらせることが必要。

以上見るように、丹沢大山での景観、自然資源の保全を前提とした、総合的な環境保全と活用施策の展開の必要性が指摘され、個々の地域の環境、文化、歴史の特性を活かした分散型のツーリズム振興策がイメージされた。この点は、局所的に登山客、観光客が集中しておきるオーバーユース対策としても有効であるとの認識である。

B. なりわい再生

丹沢の林業の履歴、林業の現状、新たな試み、これからの丹沢への展望等が話題となり、以下の意見が出た。

- ・ケヤキ、モミ、ツガ等の天然木を出荷し、昭和30年代後半から林業で食べられなくなった。
- ・雑木林であったところへ国策でスギ、ヒノキを植え、その結果、植えすぎて荒れている。
- ・今の山がどのくらいのキャパシティがあるのかきちんと捉えることが課題。
- ・丹沢は林道密度が低い。端材を出さず緑のリサイクルをする、山に返し樹木の育成に役立てるなど、丹沢での多様な利用が考えられる企業があるとよい。ヒノキ油は売れている。
- ・特徴的な材を建材として使うなど市場を狙ってチャンスを創出する。
- ・10～20年後、絶対に価値が出る、夢を見よう！！→この間の補充を行政で！

針葉樹中心の林業政策から、広葉樹活用型での川上と川下をつなげる多様な森林資源を活用した、新たななりわいの構築のアイデアが多数提示されている。地域の経済振興も含めてのなりわい再生の夢が多く語られた。

C. 暮らし再生

鳥獣被害の現状や要因、その対応策や、生態系の乱れ、調査の進め方等が話題となり、以下の意見が出た。

- ・農作物の被害や土壌の荒廃など、シカ、サル、イノシシ、ヒル等の被害に悩まされている。
- ・里山が崩れ、山の食が崩れた。里山が荒れて、山から直に里になってしまった。
- ・広葉樹林（ドングリなど）が無くなっている。鳥獣の食べ

物ではないスギなど針葉樹林が多い。

- ・アシタバ、ノブキ等を里山に植え、鳥獣が嫌いなものを植え、里山より上に鳥獣の食べ物を植える。
- ・広葉樹林の減少、上流の激流、様々な場所での放流、導水管による沢水の枯渇、ダムによる水循環の分断などが生態系の荒廃をおこしている。道志川には昔はカジカがいたが、現在はいない。
- ・方向性と実態の違い。実態が明確にされないと意味が無いのではないかと。
- ・調査項目や課題を整理する必要がある。時間設定・生き物・水など、どれに重点を置くのか。

鳥獣被害の深刻さ、その原因として山の荒廃化、ダム化に森林生態系の崩壊により、野生動物の生息環境の悪化が指摘された。また、里山の再生及び山際での野生動物対策としての農業での作付けの工夫等の提案が出された。

(2) 第 2 回地域再生フォーラムの成果

2004 年度の調査結果をグループごとにパワーポイントで説明し、グループ討論とその後の総括的な質疑討論をした。

A. ツーリズム・環境教育

オーバーユースの歴史、背景、登山道荒廃状況、利用者意識、オーバーユース対策について、2004 年度の調査報告をした。これに対して、登山靴は、登山道荒廃の原因のひとつなのか等のエコ登山の方法についての質問があった。

B. なりわい再生

神奈川県の森林概要、国産材流通、担い手、森林荒廃、所有者不明、境界不明私有地等の問題を提示し、環境保全型森林経営プラン樹立、野生動物管理事業の必要性、丹沢での生業再生の取り組みの展望等を報告した。森林バイオマスの活用目標量の設定とシカ肉の利用質問があった。

C. 暮らし再生

「農と食の復興」、「住の復興」調査、青根地区ワークショップ等の成果を報告した。これに対して、「間伐材による花粉症の影響について」、「鳥獣被害のデータのおさえ方について」の質疑があった。

D. 基礎調査・市町村 WS・地域再生フォーラムの報告

土地利用変化等の分析結果、今での市町村 WS、地域再生フォーラム成果を報告した。今後は 8 市町村に出前的な企画を検討することが話題となった。

E. 総括討論

「なりわい再生」にテーマを絞り総合討議を行った。議論を深めるため、「神奈川県で林業が成り立つのか？ 林業はいらないのか？」の刺激的な問題提起を調査チームから提示し、それに対して討議し、以下の意見が出た。

- ・林業を確保する場合、どの程度、どのようなやり方、どのような生産なのか明確にする必要がある。
- ・丹沢の県有林、私有林をこれからどのような林にしていくのか。
- ・50 年後を予想した時、林業はいるのか、いないのか。今後の具体的な目標をたてる必要がある。

・現在は外材に負け、保護伐採になってきているが、今後国産材が脚光を浴びるかもしれない。

・丹沢大山で林業をなりわいとしている 37 事業体の約 400 人の現状と問題。

・元々、神奈川は人工林での林業でまわしてきたのではなく、広葉樹を抜き伐りしてきたところ。人工林を撤退し、広葉樹利用産業に変えたらどうか。

・または、国産材の供給を担うために 50 年間準備するために人工林を残しておく。

・財産区有林が多い丹沢。その地域特性をふまえた議論が必要。(林業及び森林環境としての観点など)

・S30 年代はどこの山に行ってもとてもきれいだっただ。そのような山に今は再生することはできない。

以上の意見を得て、下記のようにまとめた。

鳥獣被害の問題を含めて複雑な自然生態系を理解し、一方で登山者や狩猟者などへの対応、森林整備、森林ドクター、林業を担っていけるように総合的森林管理技術者の育成が必要となっている。丹沢大山の森林の環境資源を総合的に評価し、森林環境資源を総合的に使用するなりわいの創造とその技術者の育成である。今までの狭い意味での林業とは違う新しい森林管理業、あるいはそれを持続的に使っていく暮らし人、そういうライフスタイルを発信していくことが求められている。

4. まとめ

今回の丹沢大山の総合調査の一つの特徴としてあった、地域再生調査チームの調査方法に関しては前例がなく、調査方法及び再生施策につなげる方法に関しては模索しながら、今回の地域参加型の調査が進められた。一定の進め方のシナリオは想定しつつも、現地での多様な課題、解決の非常に厳しい課題が突きつけられなかで、より前向きな地域再生のシナリオを、地域関係者と一緒に考え提示することを目的とした。

単に調査員が現況把握、現況課題の抽出をするだけでなく、本報告にあるように、現地での地域再生に悩む人達との調査交流を介して、より具体性の高い調査成果、再生構想の構築をはかることを目的として、聞き取り調査、市町村ワークショップ、地域再生フォーラムという多面的で地域参加型の調査手法を駆使して進めた。この 2 年間の過程で、当初は予定していなかった調査対象、調査内容の拡大が可能となり、より具体性と緊急性の高い課題、それを解決するための施策の方向性が明確になってきたものと思う。調査による課題、解決方向の提案を同時に進めながら、調査内容を吟味し、再考していくという、一種の現地関係者のモニタリング対応型ともいえる、「プロセス・リサーチ」の手法をとって進めた本調査は、まだ、不十分な点も多く、次回の総合調査においては改良の余地が多くある調査手法であったが、現場に即した調査結果が得られたものと確信している。

謝辞

地域再生調査チームのメンバー、聞き取り調査・市町村ワークショップに参加していただいた 8 市町村の職員の皆さん、地域再生フォーラムに参加していただいた多数の人々に改めて感謝申し上げます。